

Apr. 23, 2005

出(Sh'mot)12:21-51 民(B'midbar)28:16-25 マラキ(Mal'akhi)3:4-24

ヨシュア(Y'hoshua) 5:2-6:1 マタイ(Mattiyahu) 26:17-30

חַדְשׁוֹ (HaPasach, ハパサック)

はじめに、

本日は、出エジプト12章で定められている、ニサン(または、アビブ)の月14日である。この日の夕暮れから過ぎ越しの祭りが始まる。そして、本日は過ぎ越しの祭りに関わる、出エジプト12章と民数記28章の内容を例祭のパラシャ(トラーポーション)として取り上げることにする。すでに、出エジプト記を学ぶ際、過ぎ越しの祭りに関して学んだこともあるが、今回の学びでは、おさらいと共に違う角度から学びたいと思うのである。

例祭が示す意味、

私たちが、主イエスの尊い血潮によって罪の世界から救い出されたことは、ただ二千年前に突然現れたスパスター・ジーザスによると考えるのは、大変残念なことである。このような狭い思いは、ある意味において、主なる神の救いの計画をキリスト教と言う宗教の教理に限らせることとなってしまうからである。

私たちは、トラーの学びをとおして主なる神の救いの計画は、二千年前に突然起こったのではなく、すでに創世記から預言されていたことを学んで来た。それは、最初の人である、アダムとハワの罪をあがない、再び、回復されると言う、主なる神の尊い救いの計画から始まっているのである。そして、その計画のなかで預言されたとおり、メシアである、イエシュアが女の子孫として来られ、尊い血潮を流されたのである。

しかしながら、聖書のなかでは、主イエスの尊い御業について、一度だけではなく、数多く預言されている。そのうち、ニサンの月に起こった、イスラエルの歴史的なエジプトからの解放は、主イエスによる尊い御業を歴史のなかで預言されたのである。そして、イスラエルに命じられた主の例祭は、主なる神の救いの計画を明かにして下さることである。その例祭とは、レビ記23章に記されている、שַׁבָּת(シャバット)、חַג הַמַּצּוֹת(ハグ・ハマツチョ)、חַג הַשְּׂבֻעוֹת(ハグ・シャブオット)、יּוֹם תְּרוּעָה(ヨム・テルア)、יּוֹם הַכִּפּוּרִים(ヨム・キップリム)、חַג הַסּוֹט(ハグ・スコット)であるが、これらのうち、今回学ぶ過ぎ越しの祭りは、罪の世界から救いと言う重要な意味を教えている、例祭である。また、これらの例祭は主イエスの尊い御業と深い関わりがありながら、結婚の比喩として救いの計画を教えている。主イエスの尊い御業と言うのは、ただ主イエスの初臨のことだけではなく、再臨にも関わることである。

誰のための過越祭(例祭)なのか、

例祭と言えば、主イエスを信じるクリスチャンにとって、あんまり関係がないものになってしまう傾向がある。また、ユダヤ人だけの例祭と言うイメージが、もっと、強いのである。クリスチャンとしては、聖書の記されているので、ただ好奇心で知りたいと思っているだけである。このような考えは、決して聖書的ではないし、主イエスの教えでもない。なぜ、キリスト教のなかでこのような考え方が広がったのか。まず、その背景から調べたい。

キリスト教の例祭と言えば、主イエスの復活を祝うイースターと主イエスの誕生日を祝うクリスマスがある。いずれ、これらは聖書のなかで命じられている、主の例祭とは何の関係もないし、聖書的根拠もないのである。ただ、ローマ時代に彼らの文化のなかで作られたものである。元々、イースターというのは、アシェラーから由来する女神の名前である。アシェラーとは、聖書のなかで、もっとも警告されていた偶像のひとつである。また、古代ヨーロッパでは、春先に、この女神の祝祭を祝う際、豊作を願う意味として色を染めた卵を畑の回りに置いていたと伝わる。それが、今日、教会でイースターを祝いながら、色を染めた卵を食べる習慣となっているのである。

クリスマスも古代ローマの冬至に当たる時期に行った異教徒の祭りなのである。この祭りは、Saturnaliaと呼ばれる祭りである。また、古代バビロンには、この時期に豊饒の女神である、Isisの息子を祝う祭りがあったと言う。しかしながら、このような異教徒の祭りが、350年CEにローマカトリック教会のジュリアス法王によって公式に主イエスの誕生日として布告されたそうである。

このような歴史的な過ちは、初代の使徒たちがなくなった後、初代メシアニック・ジューたちがユダヤ教から離れて行くなかで、ローマを中心とした異邦人信者たちは独自のアイデンティティを作り上げることとなる。そして、313年CE コンスタンティノヌス1世による、キリスト教公認以降、異邦人教会は完全にユダヤ教とは決別となる。そのあと、325年CEに開かれた、ニケア公会議ではユダヤ人を排除したなかで、新しいキリスト教の幕を開くこととなる。この以降、キリスト教は主の例祭を守ることが出来ず、今日まで至っているのである。興味深いことは、カトリック教会の教理に反対し、16世紀に宗教改革を起こしたマーティン・ルターは、初期に、日曜日の礼拝を聖書(トーラー)に従い、土曜日にしようとしたそうである。しかし、彼がユダヤ人たちに福音を伝えたところ、ユダヤ人たちが福音を受け入れなかったため、彼は反ユダヤ主義に転じたという。このようなルターの反ユダヤ主義に対する解明と陳謝が、1983年、1994年にアメリカのルター派の教団から公式声明が出されている。

トーラーには、主の例祭とはっきりと記されている。決して、ユダヤ人だけの例祭ではない。エジプトから出たイスラエルのなかには、血統のアブラハムの子孫だけではなく、多くの異邦人も含まれている。つまり、神がイスラエルと契約を結ばれるのは、血統のアブ

ラハムの子孫だけではない。神の御目から見れば、イスラエルのなかには、血統のアブラハムの子孫と信仰によってアブラハムの子孫となった異邦人がいるのである。

「主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し／あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。』」創12:1~3<共>

「神はその嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。」出2:24<共>

神がエジプトからイスラエルを救い出されたことも、また、シナイ山でトーラーを与えられたことも、創12章にアブラハムに約束されたことに基づくのである。その約束は、血統の子孫だけではなく、すべての民を神の家族の一員として受け入れることである。つまり、創3:15のメシアの預言による、アブラハムとの契約は、イスラエルのなかに血統のアブラハムの子孫と信仰による子孫である、異邦人を含むのである。

パウロ書簡からの誤解、

多くの人々が、トーラーに対する関心はあるが、パウロの書簡に記されているところから躓く場合が多いのである。

「ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです。」ローマ14:5<共>

「だから、あなたがたは食べ物や飲み物のこと、また、祭りや新月や安息日のことでだれにも批評されてはなりません。」コロサイ2:16<共>

使徒パウロの時代には、パリサイ派とサドカイ派、また、エッセネ派の間に、例祭の日付に対する各々の意見が異なっていたのである。例えば、レビ記23:11の解釈の問題である。

「祭司は、それを主に受け入れられるよう御前に差し出す。祭司は安息日の翌日にそれを差し出さねばならない。」<共>

ここに記されている、安息日がいつなのかが問題である。つまり、過越祭の期間中には、安息日が三度ある。過越祭の最初の日、安息日に当たる。また、この期間中に土曜日の安息日がある。そして、この祭りが最後の日も、安息日になる。

パリサイ派は、レビ記23:11の安息日は、ニサンの月の15日と解釈する。また、サドカイ派は、土曜日の安息日であると、そして、クムランのエッセネ派は、この祭りの七日目の

日を示すと解釈するという。このような解釈によると、当時のイスラエルでは、少なくとも三つの暦があったこととなる。すなわち、パウロが言及している内容は、このような異論に対する、警告であると考えられるのである。もし、彼が例祭を廃棄したと考えたとすれば、次の勧告は何を意味するのか。

「いつも新しい練り粉のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい。現に、あなたがたはパン種の入っていない者なのです。キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです。だから、古いパン種や悪意と邪悪のパン種を用いなくて、パン種の入っていない、純粋で真実のパンで過越祭を祝おうではありませんか。」 1コリント5:7~8<共>

さらに、パウロがトーラーを廃棄された物と思っていたならば、彼が使徒21章で見た行動は何を意味するのか。

「...あなたは律法を守って正しく生活している、ということがみんなに分かります。...そこで、パウロはその四人を連れて行って、翌日一緒に清めの式を受けて神殿に入り、いつ清めの期間が終わって、それぞれのために供え物を献げることができるかを告げた。」 使徒21:24~26<共>

彼は、明かに例祭を守ることを教えているし、トーラーのなかで命じられている、ナジル人の誓約をしているのである。つまり、彼は完全にトーラーを守っていたのである。そのような彼がトーラーが廃棄されたと教えたとは考えられない。つまり、使徒パウロは、トーラーのなかで命じられているすべてを守って、また、教えていたのである。

結び、

先ほど言及したように、主の例祭は、結婚に比ゆされるのである。次の図を参考にして頂きたい。

ペサック	シャブオット	ヨム・テルア	ヨム・キツプル	スッコト
救い 自由	トーラー 契約 役割	王 悔い改め 誠実	贖い 浄める 所有権	喜び 留まる 永遠に
花嫁代償 メシアの血潮	婚約誓約書 メシアの御言葉	婚約 メシアの高潔	ミクベ メシアの犠牲	結婚 メシアの勝利

*この図式は、Tim Hegg師のティチングシラバスによる。

ペサックは、花嫁のために代価を払ったことに比ゆできる。つまり、主イエスの尊い血潮によって、私たちは、主イエスの花嫁として選ばれたのである。そして、花嫁として誠実に生きるために婚約契約書である、トーラーが与えられている。しかし、私たちがこのトーラーに従って生きることが出来ないとすれば、不道德な、また、不誠実な花嫁となっ

てしまうのである。今、主イエスは私たちのためにとりなしされていることは、皆が不徳な道から悔い改めて、主の道へ立ち返るように...

トーラーライフスタイルは、イスラエルの文化ではなく、主にあるすべての者のために与えられた、主の道である。

「主はこう言われる。『さまざまな道に立って、眺めよ。昔からの道に問いかけてみよ／どれが、幸いに至る道か、と。その道を歩み、魂に安らぎを得よ。』しかし、彼らは言った。『そこを歩むことをしない』と。」 エレミヤ6:16<共>